

挑戦し続ける勇気

R.K さん (69 期)

高校生活は驚くほどあっという間に過ぎた。忙しく、単調に思える日々も、実は二度と戻れない時間の積み重ねだった。ダンス部と学業に打ち込み、充実していたが、ふと「このままでいいのか」と考えた。

もっと広い世界を知り、自分の可能性を試したい。そんな思いを抱いていたとき、『龍門の襷』を知る。当時はまだ試験的な段階で、「国内派遣事業」という堅苦しい名前だったが、「今しかない」と直感し、迷わず手を挙げた。関東で活躍する卒業生を訪ね、大学のオープンキャンパスに参加する中で、自分がどれほど狭い世界にいたのかを痛感した。目の前に広がる景色は未知の可能性に満ちていた。その衝撃が、大学受験の原動力となった。

大学進学後、今度は迎える側として『龍門の襷』に参加した。目を輝かせる高校生たちの姿に、かつての自分を重ね、「あの一步が、今の私をつくったのだ」と実感した。新しい環境に飛び込むのは怖い。でも、怖いと感じるほど、それは挑戦する価値があるのかもしれない。

大学では新聞会に所属し、「伝える力」を磨く中で、ファッション誌のアルバイトに挑戦する機会を得た。ダンス部時代、衣装制作を通じてファッションに憧れていたが、「自分には無理だ」とためらっていた。でも、『龍門の襷』で踏み出した一步がまた背中を押してくれた。勇気を出して応募したことで、新たな学びと出会いが生まれ、自分の幅が広がるのを感じた。

今は広報の仕事をしている。会社の魅力をより多くの人に伝える仕事だ。社内でポストの募集があったとき、迷わず手を挙げた。人前で緊張して言葉に詰まることもあれば、思うように成果が出ず落ち込むこともある。でも、高校・大学時代の経験が、社会人になった今の自分を支えていると実感している。もちろん、挑戦には挫折もあるし、選ばなかった道への未練が残ることもある。それでも、すべての経験と自分なりの好奇心が次の挑戦に向かう燃料になる。

『龍門の襷』で得たのは、「挑戦する勇気」ではなく、「挑戦し続ける勇気」だった。未来は誰にもわからない。でも、一步踏み出せば、新しい景色が見える。迷ったときこそ、挑戦しよう。不恰好でもいい。もがきながら進んだその先に、きっと想像を超える自分に出会えるはずだ。